

【いいね！#ジェンダー平等フォトメッセージコンテスト 講評】

◆「テーマに沿った写真を撮る」というのは「美しい写真を撮る」より難しいと思いますが、受賞された作品はみなさんの写真から伝わってくるものがありました。
(大森カメラ店・大森 律子)

◆「みんなで支えよう！子育て部門」の応募作品には、育児を男性が担うことが当たり前のように捉えた写真がたくさんありました。これは、財団さんが「イクメン写真コンテスト」を 13 年間も続けてこられたことのたまものだと思います。一緒に子育てをすることで、お互いが幸せになれるというメッセージが込められた作品も多く、このメッセージが育児参画をためらっている男性にも伝われば嬉しいです。

「多様な視点で考えよう！防災部門」の応募作品には、みなさんの防災意識の高まりを感じることができる作品が多かったです。また、女性が防災リーダーを担ったり、災害時の積極的な行動につながるシーンを切り取った写真もたくさんありました。1995 年の阪神・淡路大震災の際にはジェンダー統計(男女別の被害統計)がほとんどなかったことを振り返りますと、防災・減災へのジェンダー視点の大切さが徐々に浸透しており、とても心強い限りです。

(大阪大谷大学 文学部日本語日本文学科 教授・木下 みゆき)

◆みなさんがそれぞれに趣向を凝らして撮影された写真の良し悪しを云々するというのは大変おこがましいことで、そんな資格は僕にはありませんが、そういう前提に立った上で、今回は『まったく関係のない他人が注目したり、共感したりできる要素があるか』『子育ての現状や防災に関しての気づきを提示できているか』『ジェンダー平等という点を考慮しているか』という観点から選ばせていただきました。

(大阪ガスネットワーク株式会社 都市魅力研究室・山納 洋)

◆第 1 回目のフォトメッセージコンテストでしたので、どのような作品が寄せられるか不安でした。応募者の皆さんも写真とメッセージの組み合わせに思いをめぐらされたことでしょう。様々な工夫を凝らされた作品の中で、写真とメッセージが一体となって、思わずそうだよねとつぶやいてしまう作品を選びました。

(大阪男女いきいき財団 理事長・京極 務)

◆子育て部門については、前回までのイクメンコンテストとどう差別化を図るか。防災部門については、素材をどこに求めるかが応募する方にとっては難しかったのではないかと思います。最終的に上位に来た作品は、タイトルと写真とメッセージのそれぞれが与えるインパクトのバランスがうまく取れていました。

(大阪男女いきいき財団 常務理事・松浦 功)

◆子育て部門については、子育ては、ワンオペはもちろんツーオペでも容易ではありません。パパやママだけでなく地域の方や里親など、子どもの未来をつくる様々な立場の大人の姿から、みんなで支えようというメッセージを発信していただきました。様々なシーンをシェアすることで、子育てへのあたたかなまなざしと適度なおせっかいが広がっていくことをこれからも期待します。

防災部門については、大阪市の地域防災リーダーの女性比率は 19.8%(大阪市危機管理室調べ)とまだまだ少ない状況です。応募作品からは女性も男性も多様な人が自助・共助に加わっている様子がうかがえました。多様な人の参画を抜きにして防災はできない。そんなメッセージ・シーンを増やしていきたいですね。

(大阪男女いきいき財団 理事兼事務局次長・沢田 薫)